

IF√トリプルP♪
~GirlsHappyRoad~

Lycka

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トリプルP!のProduce Poppin' PartyのIFルート作品となっておりませう。

本編でのアンケート結果に基づいて投稿している為、本編未読の方はキャラ設定等分からない部分がございますのでご了承下さい。

尚、こちらは不定期更新となります。

目次

i l	H a p p i n e s s	約 束	私 の 太 陽
79	F a i r y T a	45	1

私の太陽

「この前の件、どんな流れで進んでる」

「はい、打ち合わせ通りに滞りなく」

「くれぐれも失敗しないようにな」

「了解」

初めましての人は初めましてか。一応自己紹介だけ。俺の名前は齋藤宗輝^{さいとうむねき}。キャラ設定とか人となりとかは本編の方見てもらえると助かる。ぶっちゃけ本編見てからの方が分かりやすいしな。別に説明するのがめんどくさいとか無いから。

「取り敢えずこれで一段落着いたか」

「齋藤様」ヒョコ

「うおっ!？」

とある場所のとある部屋で自分の考えに耽っているといきなり顔だけを出して驚かせてくる人物が一人。

「…… ったく、そろそろやめてくれよメイドちゃん」

「それは出来ない相談です」

「毎度驚かされるこっちの身にもなってくれ」

「貴方を驚かせていいのは私だけですのぞ」

「いや、全然そんな事ないからね？」

なんなら学生時代に他の面子に嫌というほど驚かされてきましたから。おたえの歯ギターしかり、沙綾の口からファイヤーしかり。最終的にはバケモノみたいな衣装着てたRoselia。まあウチのお嬢様も破茶滅茶加減については折り紙付きだからな。

「それはそうと報告を」

「いきなり真面目モードになるのね」

「先日開催されたスマイル祭りの件で……」

「ほうほう……うん、何となく分かった」

「それでは私はこれで」

「いつもありがとなメイドちゃん」

「あらあら、今日は槍でも降るのかしら」

「お礼言ってるのに素直に受け取れんのか……」

話すこと数十分。色々と頼み込んでいたのもあつて時間がかかってしまった。仕事の都合上よく話す機会も多い為、そこまで苦にはなっていないものやはりめんどくさい。これはアイツに任せるしかなさそうだな。

「何を今更、私は一介のメイドですので」

「いやいや、メイド長兼執事長が何言ってるの」

「ですが流石にお嬢様の秘書には勝てません」

「役職上はそうなるけど俺は何もしてないからな」

そう、俺の目の前にいるメイドちゃん。実はメイド長でありつつも執事長でもあるかなりの実力者なのだ。ぶっちゃけこの人に仕事任せてたら一先ず安心するからお願

してる節がある。やはり持つべきものは仕事出来る仲間だな。

とは言つたものの、メイドちゃんがさつき言つた通り俺の役職は秘書。この話の流れで察している人も多いだろう。秘書たる俺の今の主は弦巻家のお嬢様である弦巻ころ様。弦巻家は世界でも有数の大金持ちであり、それなりの影響力を持ったインフルエンサー軍団。近年ではそういつたインフルエンサーの情報企業を取り扱つて宣伝しているらしく、これをインフルエンサー・マーケティングと言うらしい。これも俺が秘書になるにあたって頭に叩き込まれた知識の一部である。

「はあ…… それより例の件はどうなつてるの？」

「まあ…… ぼちぼち」

「そんなに自信が無いの？」

「そりゃあな」

これもメイドちゃんが親しみやすい理由の一つである。こうやって二人きりになった時に立場とか関係なく接してくれるのだ。正直堅苦しい職場な為、気を抜くにはうつつの相手だったりもする。こうして相談にも乗ってくれるしな。

「失敗したらこの家には居られなくなるわね」

「た、確かに」

「国外追放なんかもされたりして」

「やめてくれ、更に自信喪失が加速する」

偶に、ではなく俺の場合良くこういつた悪戯つ子なメイドちゃんが姿を現す。本当にこの人俺のことイジめるの好きだよ。弦巻家の力を使えば国外追放なんてお手の物だから殊更緊張する。

「まあ何とかなるわよ」

「そんな事言われてもな」

「いざと言う時になつたら私が何とかするわ」

「メイドちゃん……とか感動的な雰囲気になると思つたら間違いだぞ。前もそんな事言つて一つも擁護してくれなかつたくせに」

「ちつ、これだから勘の良いガキは嫌いなんですよ」

「おい、ガキつて言うな一応20歳だ」

一応20歳だし何ならお金だつて普通の人より稼いでるからね？いや、確かに俺一人の力じゃないけどさ。今となつちや令香の仕送り出してるの俺一人だから。何なら会う度に小遣いせびられるし。いつから俺の妹は金に貪欲になつたのだろうか。

「兎にも角にも本番はもうすぐね」

「まあ頑張つてみるよ」

「取り敢えず応援してるわよ」

「そこは普通に応援してくれ」

最後までブレないメイドちゃんであった。

そして一ヶ月の月日が経ち、俺の人生最大の難関とも言える日が翌日に迫ってきていた。この一ヶ月の間に色々な人に出会いアドバイスを貰った。商店街でははぐみと沙綾とつぐみに、CiRCLEではまりなさんや練習に来ていたあこ達Roseliaに。みんな昔とほとんど変わってなくて安心してしまった。

「やべえまだ前日なのに緊張してきた」

「アンタまだ起きてたの」

「バッカお前俺ぐらいのレベルになるとこのくらい朝飯前なんだよ夜遅くに朝飯前ってなんか面白くない?……… って美咲?」

「様子見に来てみれば案の定だったね」

俺が秘書専用の休憩室で頭を悩ませていると美咲が登場。そう言えば美咲もここらの秘書だったっけな。担当してる仕事が違うからそう毎日とは会う事ないんだけど。高校時代から周りより少し大人びていた美咲は、髪が伸びてロングヘアとなりますます美人お姉さんと化してしまった。相変わらずハロパピのミッシェルは続けているがその他のミッシェルについては今は引退している。何でも本人曰く”もうそんな歳じゃない”だそうです。

「なんだ秘書仲間の美咲君」

「なんでそんなに緊張してるのさ」

「そりゃここらの返答次第で天国と地獄だからな」

「はあ……… 分かってないねえ」

何故か美咲にはため息をつかれてしまった。何処か俺に悪いところがあったのだらうか。

「じゃあ秘書仲間としてアドバイスしてあげる」

「お、おう頼む」

「当たって砕けろ」

「それダメ元って事だよね!？」

「さあね」

はぐらかすように首を傾げて笑う美咲。今じゃその意味不明なアドバイスを理解する余裕もないのだ。俺の一世一代の大きなイベントなのに一か八かかっていうのもどうなんだって話なんだけどな。まあ今までどのイベントもなるようになってきたから仕方ない。結末は神のみぞ、弦巻家のみぞ知るってところだな。

「それより美咲の方でも頼むぞ」

「まあ仕事はちゃんとやり遂げるよ」

「俺の用事抜きにしても明日は特別な日だからな」

「分かってるよ」

”一々心配性なのは治ってないねえ”とか言ってるこの人本当に大丈夫だろうか。ちよつと俺の用事もだけど美咲の仕事の方も心配になってきたぞ。今更になって心配事を増やささないで欲しい。

ブルルルル

「もしもし……はいすぐ行きまーす」

「誰からだ？」

「私の口調で分かるでしょ」

「まあ大体はな」

「じゃあ行つてくる」

美咲は俺と同じく秘書なので割り振られる仕事は案外多い。こころの秘書だからといってこころ周辺の仕事だけではないのだ。やれ屋敷関係だったり弦巻家が管理している弦巻グループの企業の仕事だったり。しかし、先程の電話の相手は言わずもがなメイドちゃんだろう。美咲とてメイドちゃんには気を許している。なのであんな風に軽く接することが多いのだ。

「やる事やって寝ますかね」

く翌日く

ブルルルル

「んあ……こんな朝早くから誰だよ」

今日という日の為に寝坊防止でいつもより早くアラームをセットしていたのだが杞憂に終わってしまった。仕事用の携帯ではなく俺自身の携帯の着信なので早めに相手を確認する。そこには我が愛しの妹の名前が。

「もしもし」

「もしもしお兄ちゃん!？」

「朝っぱらから声大きいぞ」

「今日学校来るんだよね？」

「まあな」

令香は現在花咲川学園の生徒会書記として活躍している立派な女子高生。そして令香の言う通り、本日は弦巻家主催のイベントが俺とこころや美咲の母校でもある花咲川で行われるのだ。俺の用事というのはそのついでだったりもする。

「令香も書記としてイベント役員で参加するからよろしく！」

「俺忙しいから多分会えんぞ」

「別に良いもん、中等部も今日はイベントに参加するらしいから純君や紗南ちゃんも来るよ」

「確かに紗綾がそんな事言ってた気がする」

山吹家次女である紗南と長男の純は二人揃って花咲川へと進学。何でも家族全員一致で決まったらしい。相変わらず紗南は俺に懐いてるし純は滅茶苦茶イケメンになっ

てるし。近年はお年玉をあげてるからもつと好かれてしまった。お年玉の中身を見て千紘さんや沙綾が驚いていたが何故だろう。自慢に聞こえるかもしれないが弦巻家で働いているのもあつてお金には何不自由無いのだ。もしかして多過ぎたのだろうか。

「まあお兄ちゃんも頑張つてね〜」

「りよーかい」

そして令香との通話は終了。時計を見ると案外丁度良い時間だったので素早く準備して執事やメイド、黒服さん達が集まる広場へと向かった。

—広場—

「みんなおはよう！」

『おはよう御座います、こころ様！』

「今日はとーつても良い天気ね！」

広場に着き次第始まったこころによる恒例のお話。イベントが開催される度に朝こうして集まってこころからありがたいお話を聞かされるのだ。お話と言っても話す内容は全てこころに一任しているので、先程の様に今日の天気であったり昨日の出来事などを淡々と話すだけなのだ。それだけなのだ。……メイドや執事や黒服さん達は神の言葉かのように聞き入ってしまうので最初は少し戸惑ってしまった。今となつては軽くスルー出来るまでには成長したものだ。

そんな中秘書である俺はというと、黒服さん達とは違い広場に設置されたこころ専用のステージの横で待機中。勿論、俺の隣にはメイド長兼執事長のメイドちゃんやもう一人の秘書である美咲も待機。何かあった際に迅速に対応する為……という名目で普

通に世間話しているのだ。俺達もこころのお話中は何かと暇な時が多い。そこが最近の悩みだったりする。あ、因みにこの広場の名前は弦巻家で働く人の中で”大聖堂”なんて呼ばれてたり呼ばれてなかったり。それより俺命名の”ブラックZONE”の方がしつくりくると思うんだけどなあ。ほら、こころ以外全員黒服だしさ。メイド服も特注で黒をベースに作ってあるし。

「今日は大切なイベントの日！みんなには期待してるわよ！」

『御意』

今時返事するのに御意とは言わんだろ。しかしここは弦巻家、それでまかり通ってしまうのもまた弦巻家たる所以なのだろう。現にこころのお父さん相手には俺ですら時々御意って言うほどだ。でも何故かこころのお父さんが俺にはフランクなんだよなあ。

「お疲れさん」

「あら、宗輝はこっちに居たのね」

「お嬢様、失礼ながら斎藤様は”こころには俺がついてないとな！キリツ”と言い張るので仕方なく連れてきております」

「おいそのメイド平気で嘘つくな」

「嘘とは失敬な、私はこころ様に誓って嘘などついておりません」

ここのメイドまたしてもイジってきやがったなこんちくしょう。良いもんね、俺にはお仲間の美咲がいるもんね。別に寂しくなんかないんだから。

「美咲も何か言ってくれ」

「ん？ごめん聞いてなかった」

「お前ほんつとにマイペースだな」

「どうせアンタが悪いんでしょ？」

「何故そうなる」

高校卒業とともに進化してしまった影響か、美咲が恐ろしくマイペースになってしまったのだ。ハロパピを裏で操っているのは美咲と言っても過言ではないレベル。だって言いようによっちゃここもコントロールできるまでになっちゃってるから。それも美咲が弦巻家の実権握っちゃってるよね。

「美咲もメイドちゃんも冗談が上手いわね！宗輝は私の秘書だから側に居て当然じゃないー」ギョツ

「ちよ、こころいきなり抱きつくのはNGだって」

「どうして？」

「くっ…… そうやって絶妙に首を傾げて可愛らしく言われると強く言えないのが難点だ」

「心の声がダダ漏れしてるよ宗輝」

おつと失敬失敬、腕に抱きついて可愛らしく聞いてくるところが悪いんだ許してくれ。こころに抱きつかれた時にふわっと香るキツ過ぎない甘い匂いは俺を誘っている

としか思えん。

「お嬢様、そろそろお時間になります」

「あら、楽しい時間は早く過ぎてしまうものね」

「こころはイベントの主催者だから遅れちゃダメでしょ」

「美咲！だつたら運転をお願い！」

「はいはい……じゃあ私はこころを送ってくるから」

「了解、俺達もすぐ行く」

美咲とこころ、そして2人の黒服さんを連れてとんでもなく高級な黒塗りのリムジンへと乗り込むこころ達。基本的には運転手がそれぞれの車に専属で付いているのだが、こうして偶にだが秘書である俺や美咲が運転することもあるのだ。知ってるか？リムジンつてめちゃんこ運転難しいんだぜ？

兎にも角にもこころが出発したのに俺達が遅れる訳にもいかない。一旦屋敷へ戻り

車の鍵を持って高級セダンが何十台も置かれているガレージへ向かう。実はこのセダンは弦巻家が総力を上げて開発した代物。一部富裕層にのみ要相談で取引している市場には出回っていないハイスペックセダン。その中の一台に乗り込みエンジンをかける。

コンコン

出発しようと思った矢先に窓をノックされたので確認の為に開けてみる。

「隣良いですか？」

「別に良いですけど、運転はしてくれないんですか」

「私運転が下手で……」

「いやいや自分の車ガッツリスーパーカーだろ」

「時間が無いので急ぎましょう」

「はあ………早く乗って下さい」

助手席で鼻歌を歌いながら楽しそうにしているメイドちゃんには後で仕事を押し付けよう（使命感）

朝の時間だったが渋滞に巻き込まれる事なく母校花咲川へ到着。着いた途端に仕事モードに切り替えた俺とメイドちゃんはそれぞれの持ち場へ着く。メイドちゃんは何やらお店を出す手伝いをするらしい。俺はというと、勿論こちらの側で何かあった時の対処の為待機。

しばらくすると体育館に在校生が集まってイベントの式典が始まる。このイベント、

実は言うところの思い付きで始まったので開催は2回目だったりする。去年は初めてという事もあり手探りで進めていき、少し手違いがあった事もしばしば。その反省も踏まえての今年のイベントだ。こころや俺達の気合いも充分。絶対に成功させてみせるからな。

「今日は楽しい一日になりそうね！」

「…… お兄ちゃん」

「ん？ おお、令香どした？」

現在はステージにてこころの有り難いお話が始まって5分といったところ。もうすぐ終わるのでステージ横で待機してたら令香に見つかってしまう。左腕の”生徒会”と書かれた腕章が似合う立派なJKになってお兄ちゃんは嬉しいぞ。

「この後の予定聞いておきたくて」

「予定つつつても、俺はずつとこころと一緒にいると思うぞ」

「じゃあこころんの予定教えてよ」

「多分校内をずつと見て回るんじゃないか？」

「はあ………秘書が多分とか言わないでよ」

これにもちゃんとした理由はあるのだ。昨晚こころに最終確認で今日の予定を聞いたら「私は宗輝と一緒に校内を回りたいわ!」と満面の笑みで返ってきた。秘書としてはお嬢様の気の向くままに従うだけだ。よつて、これについては俺は悪くない。

「令香も一応校内の見回りだから、何かあつたら携帯にでも連絡してね」

「了解、まあお前も楽しめよ」

そしてそこで令香とは別れ、そのタイミングで式典も終了。いよいよイベントがス

タート。花咲川の校門や各所に黒服さん達が待機し、怪しい人物を見かけ次第連絡対処を行う警戒網を用意。耳に付けたイヤホンで随時連絡を聞き、ピンマイクで俺から指示を出すのが基本の流れだ。しかし、そちらにかまけているところにお叱りを喰らうので注意しなければいけない。

「お疲れ様ところ」

「さあ校内を回るわよ！」

「その前にところ、これだけ付けといて」

「それは何かしら美咲」

いつの間にか来ていた美咲が何やらところの服にバッジの様なものを取り付ける。それを良く見てみると、なんとミッシェルの顔をしたバッジ、に見えるGPS機能付きの追跡装置だった。そういうやこんな優れものもあつたっけな。

「ただのミッシェルのお守りだよ」

「じゃあ一生大切にするわね！」

「イベントが終わったら返して欲しいんだけどなあ……」

「それじゃあ早速行きましょう宗輝！」

”まあいつもの事か”と少し呆れた様子で微笑む美咲。美咲……大丈夫だ、問題無い。俺がちゃんと後でこつそりと回収しておいてやるから。

「すまん美咲、後は頼んだ」

「アンタもこころの事は頼んだよ」

「おう、任された」

そして、ここからはこころの好きなように気の向くままに校内を回る。

「あそこに行ってみましょう！」

「ちよ、服！服は引つ張るなこころ！」

在校生がお店を出しているスペースをくまなく回り、その度に目をキラキラと輝かせていたこころ。

「んん、このパフェ美味しいわよ！」

「どれどれ、俺も一口……」パクッ

年に一度のイベント日の為、学校側から許可を貰ったクラスは食べ物なんかもお店として出しているのだ。こころは案外スイーツが好きなので何店もはしごしては食べはしごしては食べの繰り返しだ。

「体育館でライブをしているらしいじゃない！見に行きましょう宗輝！」
「へいへい」

俺達が卒業してからもガールズバンドブームは身を潜める事無く、更に盛り上がりを見せている。珍しくバンドの中でバイオリンがあるバンドも出てきたくらいだ。まあその話は長くなるからまたの機会に話すとしよう。

そして、何一つ問題が起きる事無くイベントは終わりを迎えた。

「今日とはーっても楽しい一日だったわ！」

「そりゃ頑張った甲斐もあったもんだ」

時間を忘れて過ごした楽しいイベントも幕を閉じ、片付けに手間取る事なく速やかに撤収出来たのは収穫だ。去年は最後にもたついたのもあって反省点だったからな。そんなこんなで今は弦巻家のこころの部屋。

「宗輝も頑張ってくれてありがとう！」

「こころも色々とご苦労さん」

何故俺がこころの部屋にいるのか。これまでの流れで察している人もいるだろう。

そう、俺は今日遂にこころにプロポーズしようと思ってるのだ。その前にお前ら付き合ってるの？とかいうマジレスは勘弁してもらいたい。少々話が噛み合ってなかったかもしれないが、お互い好きなのは既に確認が取れている。周りの人も頑なに大丈夫だと言ってくれるし間違いは無いだろう。

「ちよつと話があるんだけどいいか？」

「あら、もしかしてもう楽しい事を思いついたのかしら」

「捉え方によっちゃ楽しいな」

「じゃあ早速教えて頂戴！」

しかし、いざとなるとやはり怖くなってしまふものである。良くある恋愛のポエムのようにはいかないのが現実というものだ。そこら辺にいる甘ったるいカップルなんて〇ヶ月♪、とかSNSで更新してるけどその何ヶ月後には大半のカップルが別れてる気がするし。別れるのをカウントダウンしてるのかと時々勘違いするレベルだ。

という風にほんの少しだけ本音の部分が漏れてしまったが、今重要なのはそんなチンケな事ではない。大袈裟に言えば俺の今後が左右される大問題。生半可な気持ちではこころにも失礼だ。ここは一つ深呼吸をして気持ちを落ち着かせよう。

「ふう……ここ、こころ聞いてくれ」

「うん！」

「えーっと、まああれだ。あの事についてなんだけど」

「あの事？」

深呼吸したはずなのに心臓バクバクなんだけど。やはり俺は嘘を付くのが苦手らしい。しかし、もうこうなってしまうえば取るべき行動は一つ。素直にドストレートに想い

を伝えるしかないだろう。ええい、ままよ！伝われこの想い！

斎藤宗輝、いざ参ります。

「俺と結婚してください!!」

あー、これ終わった。やったわ、これ完全にやらかしたわ。なんだよプロポーズで囁むって。ありえなくね、自分マジでありえなくね？これからまずは国外追放されてその先で指名手配されるだろ。いや、その前に首ちよんぱの可能性がなきにしもあらず。いや待てよ、俺から切腹すれば少しは良い終わり方になるかもしれない。そうだ、最後までいは綺麗に終わろう。有終の美なんて言葉もあるくらいだからな。

斎藤宗輝、いざ参ります。

「す、すまんごころさっきのは無しで、ってひでぶっ!!」

「…………ギョッ」

ところがギツチヨン、猛烈なダイブをごころからモロに受けなし崩的にベッドへ倒れ込んでしまう。

「ごころ?」

「…………ズルイわ」

「いきなりどうしたんだ」

「ズルイわ宗輝! 私から言おうと思ってたのに!」ポロポロ

胸に顔を押し付け付いていた為、今までは分からなかった。だが顔を上げ俺を見るころの頬には一筋の涙が零れ落ちていた。そんなところを見て、俺は純粹に美しいと感じていた。

そして数秒程俺は見惚れてしまい、二人の間を静寂が包む。そんな中、その静寂をかき消したのはこころだった。

「私も貴方が好きよ！私と結婚して頂戴！」

「俺から言つといてなんだけど、俺で良いのか？」

「宗輝が一番良いの！」スリスリ

俺の胸の辺りにほっぺスリスリしてる可愛い天使は誰だろう。視界が歪んでちよつと良く見えませんね。あ、これ俺が泣いてるからだわ。テヘペロ！

「美咲達もありがとう！」

「こころもありが……ん？今美咲って言った？」

「入ってきてても良いわよ！」

そのここのろの言葉を合図に鍵が掛かっていたはずのドアが開き、美咲とメイドちゃんが入室。この部屋の鍵は俺とここのろしか持つてないはずなんだけどな。まあ大体ここのろが美咲にでもスペアキーを渡したのだろう。

「プークスクス、”結婚してくだしい!”だって」クスクス

「ちよ、こらそこのメイド今笑ったな!？」

「まあまあ面白かったよ」

「美咲まで!？俺もうお嫁にいけない……」トホホ

「アンタは嫁じゃないでしょ」

こんのメイド野郎バカにしゃがって。そんなだから彼氏の一人も出来ないんだと思いますね。まあ？俺はたった今プロポーズに成功したわけですけど!？

「美咲、準備は出来てるかしら」

「バツチリだよ」

「おい待て、準備つてなんだよ。もしかして最初からグル？」

「お嬢様と宗輝君には今からハワイへ飛び立って頂きます」

さあ話が急展開を迎えております弦巻家某所。どうやら美咲とメイドちゃんは最初からこの話を企てていたらしい。俺とところが改めてお互いの気持ちをつけたところでハワイへ飛び立てとのご名案。トントン拍子で進んでるけどそれで良いのか弦巻家。

「ちよ待て、ハワイ？この時間から？」

「何言つてんのさ。スマイルジェットがあるじゃん」

「ああそうでした忘れてました自家用ジェットですね」

弦巻家にはこころ専用の自家用ジェットが置いてある。その名もスマイルジェット。

なんでも国内有名メーカーと共同で開発した代物らしく、金額にするとふええな額になるので一応伏せておく。

「さあ行くわよ宗輝！」グイッ

「後で覚えてろよ二人共」

「いつてらっしやいませ」

「偶には二人つきりで楽しんできなよ」

美咲の言う通り、これまで秘書として働いてはいたがこころと二人の時間はあまり取れていなかったのだ。その点に関しては今回のハワイ行きは素直に嬉しい。ただやり方が解せないなので帰ってきたら仕事を押し付けようそうしよう。

「こころ、飛行機乗る前にこれ」

「ん？これは何かしら？」

プロポーズの時に渡そうと思っていた箱を今取り出してこころに渡す。その中には向日葵をモチーフにした指輪。驚く程高いって訳でもないが、特別な想いの込められた俺なりの婚約指輪だ。

「確か高校の時に俺の事太陽だつて言ってたよな」

「……………うん」ポロポロ

「だからさ、俺にとつてこころは向日葵みたいな存在でいて欲しいな。向日葵つて太陽の方向をずっと見てるだろ？これからもこころにはずっと俺を見て欲しい」

そう言って、再び涙を流すころの手を取って指輪をはめ込む。

「ころ……大好きだ」

ありきたりな言葉だが、今はそれで……それだけで良いと思った。メイドちゃん
が居て美咲が居て黒服さん達が居る。商店街には沙綾達だって居るし俺達を応援して
くれる人は沢山居る。

そして、俺の隣にはこころが居る。だから、今はそれだけで幸せだと感じる。

「私もだーいすきよー!」 チュッ

願わくばこの幸せが永遠に続きますように。

I F √ : 私の太陽

約束

「いらつしやいませー！」

とある日の昼下がり。

俺はやつて来てくれるお客さんに精一杯の感謝の気持ちを含めて”いらつしやいませ”という言葉をお口にします。朝のピークの時間を過ぎ、今は少しゆったりとした時間が流れている。そんな中でもせつせこ手だけは動かして、当店自慢のチョココロネの生地を黙々と作っていく。

「すみませーん」

「はーい！今行きますねー！」

今はお店に俺一人しかいない為、お会計の際は生地をこねるのやめてレジまで急いでダッシュする。時々急ぎ過ぎて手を洗うのを忘れてしまうのがネックだ。

「お会計でよろしいですか？」

「お願いするわね」

「チョココロネがお一つとメロンパンがお一つ、それとやまぶきパンがお二つですね」

数え間違いや種類に間違いのない様にするのが大切。前に少し間違えて紗南に怒られてしまった事がある。会計は紗南に任せる事も多いので余計に気を使わなければならない。

「いつもありがとね」

「いえいえ！またのお越しをお待ちしてます！」

「あ、そうそう。これ昨日晩ご飯で作った漬物なんだけどね、作り過ぎちゃったからあげるわよ」

「いい、良いんですか？しかもこんなに貰っちゃって……」

実は言うところ、こういう事は少なくは無いのだ。ウチを鼻屑にしてくれているお客さんも沢山知っているし、その中では割と恒例行事の様になりつつもある。今回の様に漬物だったりする時もあればガッツリお肉を貰う時もある。果てにはギフト券や使わなくなった家具まで持って来るお客さんもいるくらいだ。流石に家具に関しては断ったけどな。

しかしながら、今回は強く出る事も出来ずになし崩しで漬物を貰ってしまった。また今度新作のパンが出来たら真っ先に試食してもらおうとするか。前はお会計で割引しようと思ったら「お代はきっちり払わないとね」って言われたし。ちよつと強引な方が

良いのかもしれない。

カランカラン

「いらつしやいませー」

「さんしやいゝん」

貰った漬物をそこら辺に置いて駄目にする訳にもいけないので、取り敢えず部屋に戻って冷蔵庫へとしまい込む。そのタイミングでお客さんが来たつぼいので慌ててお店の方へ戻る為に暖簾を潜る。

そうすると、見覚えのある顔がニヤニヤしながら買っていくパンを吟味しているのを見つける。

「ただいまパン焼き上がりました」

「およ？今回は騙されませんか？」

「純々、新作のパンちゃんと焼けてるかー？」

「むつくん今度何か奢るよ？ついでにひーちゃんもつけとくし」グイッ

「めつちや切り替え早いなおい、というかひまりをついでにすんなし」ペシッ

新作のパンをダシにおびき寄せると、尋常じゃないレベルでグイグイ来るのは相変わらずのパン大好きモカちゃんである。流石に距離が近過ぎたので懲らしめる意味も込めて宗輝チョップをお見舞いする。"あう"と言つてうづくまるモカ。力は全然入れて無いので演技なのがバレバレだ。そこは薫先輩の様に美しく儂い演技じゃないと俺は騙せんぞ。

「買いたいパンは決まったか？」

「いつもの良いよ」

「良いよって、何で毎回俺が取らなきゃいけないんだよマジで……」

そうは言いつつもチョココロネとメロンパンにうさぎのしっぽパン、黒糖パンに後はクロワッサンを一つずつ袋へ詰め込んでいく。これも毎度お馴染みの光景である。

「お代いくらだっけ〜?」

「いんや、今回は特別に良いよ」

「え〜、それじゃあ怪盗モカちゃんになっちゃうよ〜?」

「別に盗んで無いから怪盗にはならんだろ。それにどうせそのパンみんなに差し入れだろ?」

「およ? 何でむーくん知ってるの〜?」

そりゃあここに来るのは何もモカだけじゃないからな。先週は巴とあこが二人で買いに来てくれたし、なんなら昨日はひまりが来てパン買った後に小一時間くらい駄弁つて帰ったしな。しかも商店街の地域会議で時々つぐみにも会うからその時にアフグロについては色々と話聞かし。

「俺の情報網を甘く見たな」

「ふっふっふ〜、モカちゃんの情報網も甘くないよ〜?」

「ふっ…… それはダウトだな」

「この前さーやと二人で映画館デートしてたよね〜？」

「おい何で知ってんだよ」

いやマジで。確かに沙綾が映画見に行きたいって言うから一緒に映画見てその後ご飯食べて帰ったけど。何故それをモカが知ってるのか是非教えてもらいたいもんだ。

「お互い様って事だね〜」

「じゃあこれは口止め料だな」

「それはどうかなく〜？」

一々はぐらかす様な返事をするのもモカらしいっちゃモカらしい。今後は少し周りを気にしながらデートすることしよう。

結局、差し入れのパンを袋詰めして渡してから数十分はひまりと同様に世間話を交えて駄弁ってしまった。大体はモカが話して俺が適当に返事してただけなんだが。

カランカラン

「ただいまー」

「むむ、もしかしてさーや達帰ってきた?」

「そうみたいだな」

店側ではなく家側のドアが開く音が聞こえ、パンの材料の調達も兼ねて外出していた沙綾達が帰ってきたのが分かる。荷物があるかとも思い玄関に向かおうとしたのだが、先に沙綾と同行していた紗南が暖簾をくぐって来てしまう。

「宗輝お待たせー…… ってモカ来てたんだね」

「さーやお帰り〜」

「お帰り沙綾。荷物はどうしたんだ?」

「お父さんと純が運んでくれてるよ」

「呼んでくれたら俺が運んでたのに」

どうやら千紘さんと紗南に言われて二人が運んでいるらしい。まあ千紘さんは元々身体が余り良くは無いので当然と言えば当然だろう。多分純に限って言えば紗南に命令でもされたんだろう。その辺りはすっかりお姉ちゃんになってしまった紗南。俺でも時々叱られるくらいだからな。

「お兄ちゃんまたエプロン汚してる」

「どれどれ…… あー、また癖でやってる」

「その癖早く治さないとね」

なんやなんや言いながらも汚してしまつた部分を紗南が綺麗に拭き取ってくれた。パンを作る時に手をエプロンで拭いてしまう癖というのも難儀なもので、知らぬ間にエプロンが汚れているので仕方ないのだ。という風に紗南に伝えると「私の仕事増やさないでよお兄ちゃん」と言われてしまう。紗南のお兄ちゃん呼びには慣れたものの、俺だって好きでやってる訳では無いのを分かってもらいたい。

その後、沙綾と紗南と俺とモカの四人で世間話を交えながら楽しくお喋りをして時間が過ぎていった。勿論、お客さんが来たらモカ以外の3人で対応はする。モカはどっちかと言えばお客さんサイドなのでその間は携帯いじってたみたいだけどな。

「そろそろ帰るね〜」

「おう、気を付けて帰れよ」

「モカさん、また来て下さいね」

「さーなのお願いじゃしようがないですな〜」

「今度はちゃんと自分でパン選べよモカ」

結局、先日のひまりと同様に駄弁るだけ駄弁って帰ってしまった。その間千紘さん達にパン作りの方を任せつきりになって申し訳ない。接客は沙綾に任せといて俺は千紘さん達と交代してくるか。

「千紘さんお待たせしました…… あれ、千紘さん何処行った？」

「母さんなら家の方だよ」

「純か、悪いな荷物運び手伝ってもらって」

「うん、それは良いんだけどさ」

何か浮かない顔をしている純を見て、俺は咄嗟に頭の中でひらめいてしまったのだ。純がこうして何か悩んでいるように見える時は大体理由が分かかってしまう。純も思春期真っ只中ってわけだ。

「もしかして令香の事考えてたのか？」ニヤリ

「……」コクリ

「何かあったのか？」

「……」今朝送ったメールの返信がまだ来てないから、もしかして嫌われたのかなって思ってた」

あー、これはもう恋しちゃってますね。まあ分かったことではあるんだけどな。俺が沙綾の家に本格的に手伝いに来るようになってからというもの、令香もお店の方に顔を出す様になり、その都度相手してもらったから純も意識し始めてもおかしくはないんだよなあ。んー、確かあいつ今日から修学旅行って言ってたっけな。

「多分だけど、今日からあいつ修学旅行だからそれで返信遅れてるんだと思うぞ」

「本当？俺嫌われてないかな？」

「心配すんなって、令香がそんな人間に見えるか？」

「でも……」

純は案外乙女というかなんというか、恋愛には奥手なんだが少々メンタルが弱いのかもしれない。香澄とかに抱きつかれるとすぐ逃げてた辺り歳上の女の子の耐性がないのか。それとも逆に歳上好きなのか。多分後者なのだろうな。

「それなら確認してみれば良いって事よ、ほれ」ヒョイ

「えっ!? ちよ、何してんの兄ちゃん!？」

『もしもしお兄ちゃん?』

「も、もしもし!」

通話相手は勿論マイスイートエンジンシスター令香。この方法が一番手っ取り早いと思ったのですぐ行動。まあ携帯が俺のだから令香は俺が電話かけてきたとしか思っていないかもな。

『あれ? この声……もしかして純君?』

「はい!」

『どしたの? またお兄ちゃんが何かやらかしたの?』

「そういう訳では無いですよ! 最高の兄ちゃんです!」

『……怪しいなあ』

純があからさまに俺の事褒めるから令香が疑い出したじゃねえか。別に俺は令香に電話かけただけで何もして無いです。

『まあ良いや、それで何か用事でもあった？』

「えーつと…… 修学旅行楽しいですか？」

『うーん、まあ普通かな。というか純君に修学旅行の事言つてたっけ？』

「姉ちゃんから聞きました！」

『沙綾さんからつて事はお兄ちゃんが情報源だね』

それから修学旅行の事について数分間程ではあるが、純と令香の二人で何やら楽しく話していた。俺は既に令香の修学旅行の予定については把握済み。今は確か水族館らへんを観光しているに違いない。俺らの時は近場で京都だったのに対して、令香達は沖縄だから羨ましい限りだ。

「じゃあ俺お店の手伝いしてきます！」

『うん、頑張つてね純君。それとお兄ちゃんに代わつてくれるかな？』

「分かりました！」

純が携帯を渡してくるので受け取って代わる。

「もしもし」

『お兄ちゃん純君に何かしたの？』

「何もしてないってば」

『変なことしてたら沙綾さんに言いつけるからね』

「マジで勘弁してくれ、いや何もしてないのは事実だけど」

いつも通りの兄妹の会話をして通話を切る。

「あれで良かったのか？」

「うん」

「何でメールの事聞かなかつたんだよ」

「お姉ちゃんの声が聞けたから別に良いかなって」

どうしよう、純が物凄い健気でビックリしてる。令香は高校3年生で純はまだ中学生になったばかりだ。そりや世間一般的に考えればあまり成立するとは思えない歳の差

だろう。だがしかし、これほどまでに真剣に想ってくれてるともなれば応援しない訳にはいかないだろう。例えその相手が俺の妹だったとしてもだ。それに純なら俺の審査には合格してるからな。

「純、お前は良い男になれる」

「兄ちゃんいきなり何言ってるの」

「宗輝居る？」ヒラッ

「お、沙綾どした」

接客してたはずの沙綾が暖簾を潜ってパン作りを行うキッチンのスペースへやってくる。流石に時間かけ過ぎて怒ったか？

「ちよつとお客さんの対応お願いしたいんだけど」

「そんなに沢山居るのか？」

「うーん、ちよつと厳しいかも」

「なら俺が行くよ姉ちゃん」

威勢良く出た純だが、いかんせんあまり接客を得意としない点を俺と沙綾は知っている為少し躊躇ってしまう。純のせいではないのだが、前に一度接客を任せて少し詰まってしまう経験もあるのでどうしても不安が残る。

だがしかし、ここは純に任せてみよう。純だって今回は嫌々するんじゃないかと自らやってみようと決心してるはずだ。それをとめるのは俺の仕事じゃないと思うし。

「よし、じゃあ純やってみるか」

「うん！」

「大丈夫？」

「大丈夫だよ姉ちゃん。俺もやれるってところ見せない！」

やる気充分といった様子でお店へ駆けつける純。そんな純を見て不安げな表情を浮かべる沙綾。やはりお姉ちゃんとして心配なのだろう。

「まったく、肝心な見せたい奴が居ないのに張り切ってんな」

「純に任せても良かったの？」

「何かあれば俺が行くよ」

それでも尚、首を傾げながら考えている沙綾を見て少し懐かしい気分になる。俺が最初にお店に立って接客するってなった時も同じ様に心配してくれてたっけな。

「心配性なのは相変わらずだな」

「じゃあ宗輝は心配じゃないの？」

「心配だけどやらかなきや上手くもならないだろ。まあ紗南も付いてるし大丈夫だって」

「宗輝がそこまで言うなら良いけど……」

「沙綾、純は今思春期真っ只中なんだ……男にはそういう時期があるってもんだ」

「ごめん宗輝何言ってるか全然分かんない」

しつかりしてる紗南も居るし大丈夫だろう。俺達にはパンを作ってお店に持つていくという仕事があるからサボってる訳にもいかん。しかも今日は久しぶりに沙綾と俺

のコンビだからな。

それからやまぶきベーカリー閉店までの間、俺と沙綾でパン作りを担当して純と紗南の二人で接客を担当した。沙綾の心配性と同じく俺のエプロン汚しの癖も相変わらず治らないままである。接客の方は何とかピークの時間も二人で回し切る事が出来たみたいで一安心だな。

「ご馳走様でした」

「お粗末様でした」

「俺も片付け手伝うよ」

無事に今日のお仕事を終えて、山吹家と俺含め6人でワイワイしながら食卓を囲んだ。最初に食べ終えた純からお風呂へと直行。千紘さん達は部屋へ戻って俺と沙綾の二人だけがキッチンに残ってしまった。まあ基本はこんな感じで俺が食べるペース遅いからなんだけどな。

ラーラーラーラー♪

「ごめん宗輝、電話きたからお願いしても良い？」

「了解」

俺と沙綾の食器洗いデートを邪魔するが如く電話がかかってきてしまった。まあこれも恒例っちゃ恒例なんだけどな。というか食器洗いデートってなんだし。自分で言ってるて訳分からんわ。

「さーてと、今日は誰からの電話かなー」

食器洗いも終えて、乾燥させる為に綺麗にお皿やコップを並べていく。こちら辺は流石山吹家。最初に少し雑に置いたら紗南に叱られました。

「商店街メンバーの可能性もあるが、意外と夏希とかの可能性も無きにしもあらずって感じか」

「何独り言言ってるのお兄ちゃん」

「おお、紗南お風呂は？」

「もう入ってきたよ」

一通りやるべき事を終えて冷蔵庫に保管してあつた食後のデザートを取るところを紗南に見られてしまった。隠れて食べてるのがバレたら何言われるか。

と思つてたら結構前から紗南は知つてたらしく、私の分も寄越せと言わんばかりに手を伸ばしてきたので仕方なく在庫分を渡す。また俺の食後のデザート買つとかないとな。俺はこう見えて甘いもの好きなのである。令香にはあんまり食べない様に言われているんだけどバレてないよね？

「お兄ちゃんさー」

「んー」

「お姉ちゃんとは付き合ってるんだよね」

「そだなー」

「はあ、何処かにお兄ちゃんみたいな人いないかなあ」

いきなり何を言い出すのかしらこの子。俺みたいなやつが他に居るわけないだろう。だつてさ？まず周りが可愛い女の子だらけだろ？バンドもスゲエ奴らばかりだし何より可愛い。果てには世界レベルで富豪な某弦巻家とも仲良しやってんだぜ？この前なんかボソツと”沙綾と二人暮らし出来たらな”つて独り言ところに聞かれて”どの家が欲しい？”つて可愛く聞かれたからな。勿論すぐに断ったけど。

「残念ながら俺みたいな奴はいないと思うぞ」

「じゃあ紗南と付き合つてよ」

「待て待てそれはおかしい」

高校生の頃から何かと好かれてたのは知ってたがここまでとは。俺の甘やかし過ぎが原因だろうか。

「じゃあお兄ちゃんは誰の事が好きなの？」

「そりゃあ沙綾に決まってるだろ」

「どのくらい？」

「結婚したいくらいには」

「本当に？」

「やまぶきベーカリーに誓って」

「それは意味分かんないけど」

酷い紗南ちゃん、やまぶきベーカリーに誓うというのは山吹家では最上級の誓いではないのか。てつきり俺はそう思ってたんだけどな。

「というか俺はもうそのつもりでここに居るんだけどな」

「はあ…… やっぱお姉ちゃんには勝てないか」

「ん？」

「もう入ってきて良いよー」

その紗南の言葉を聞いて他山吹家メンバーがゾロゾロとリビングへと入室。もしかして紗南に嵌められたのか？だから妙に質問が多かったのか。いやいや、というより紗南さん何やってくれてんの。あれ全部聞こえてたって事でしょ？あarayだ恥ずかしい。

「ちよままあ!!」バサッ

「何やってんのお兄ちゃん」

「やめて恥ずかしい見ないで」

「兄ちゃんカッコ良かったよ!」

「今はやめてくれ純……」

沙綾とか千紘さんに聞かれてたと思うとクソ恥ずかしいので顔をエプロンで隠して

しまう。あんなにも臭いセリフをいつから吐ける様になったのだろう。多分令香辺りにバレると笑われるに違いない。

「宗輝はさ、私なんかで良いの？」

顔を赤く染めながらモジモジと聞いてくる沙綾。普段は高校生の時と比べお姉さんっぽさ増し増しだが、こういうのを見るとやはり根の部分は変わってないんだと思う。相変わらず甘え下手だし心配性だし世話焼きだし。

でも、きっと俺はそんな沙綾だからこそ惹かれたのだろう。だからこそ、この質問には自信たっぷりでこう答えるしかない。

「俺は沙綾が良い。沙綾じゃなきや嫌だからな」

「そ、そっか……えへへ、嬉しいなあ」／／／

照れているのがイマイチ隠し切れていない沙綾。ボソツと言ってるの全部聞こえてるんだけど可愛すぎか。

「宗輝君、高校生の時に私が言ったこと覚えてる？」

「千紘さんがですか？」

「あの約束忘れたのかしら」

千紘さんの口から”あの約束”という単語が出てきて久しく思い出す事が出来る。

あれは沙綾がポピパに入る以前の話だ。香澄達に協力して沙綾をポピパに誘った時期で、確か俺が沙綾んちにお邪魔してた時だったっけな。いや待てよ、でもこの話の流れから察するにそういう事？だとすれば千紘さんほとんどない策士か一種の天才だろ。

「沙綾を貰ってくれてるって約束よ」

「ちょ!?!母さん何言ってるの!」／／／

「あら、別に良いじゃない。沙綾だつてさつき宗輝君の気持ちは聞いたんでしよう」

「それはそうだけどさ」

「だつたら沙綾も気持ちを伝えるべきじゃないの?」

千紘さんに言われてギクつと反応する沙綾。確かに俺の気持ちだけ盗み聞きとは納得いかない。流石千紘さん、やっぱり分かっていますね。

「ほらお姉ちゃん」トン

「姉ちゃんフアイトだよ!」トン

「純と紗南まで……分かったよ」

純と紗南に背中を押されて決心したのか、俺と正面から向かい合う形で目と目が合う。

「最初は正直宗輝の事あんまり意識してなかった。だけど、ポピパのみんなや宗輝と触

れ合っていく中で私に色々な物を与えてくれた。それは経験だったり思い出だったり、時には辛い事もあったけどみんなと一緒に乗り越えられるって感じてた」

「うん」

沙綾と初めて出会ったのは入学式の日。クラスを見てた香澄が偶然ぶつかった事から始まった。あの日沙綾と出会ってなかったら、と思えば偶然や奇跡や運命様に感謝すべきかもしれない。

「宗輝が私を救ってくれたあの日から、私の恋が始まったんだと思う。笑ってくれれば嬉しくて、悲しんで泣いてたらこっちまで苦しくなって。いつしか宗輝のことばかり考える様になってた」

「……うん」

どこまでも純粋な沙綾は、きつと誰よりも優しい女の子だ。困っていれば助けしてくれるし迷っていたら導いてくれる。そんな誰よりも優しく強い沙綾だからこそ、歪な過去を持つ俺でもこんなにも好きになれたのだろう。

「二人で何でも出来る様に見えて人一倍頑張り屋さんで、強がりだけど寂しがりで自分に厳しいけど本当は甘えたがり。他の人の知らない部分を私は沢山知ってるし見てきた」

悔しいが言ってる事はあながち間違いじゃないから否定できんな。まあ俺だって沙綾の事沢山知ってるしお互い様か。

「だから、そういうの全部引くくるめて宗輝が好き…… 大好き」

真っ直ぐな眼差しで俺を見つめ”好き”という二文字^{気持ち}を伝えてくれた沙綾。

「ありがと沙綾」

「お熱いわね〜」

「見てるこつちまでドキドキしてたよ」

「母さんも紗南もやめてよ恥ずかしい」／／／

千紘さんと紗南の一言を皮切りに少し張り詰めていた空気が和らぐのを感じる。千紘さん達の前でこんな事するとか思いもよらなかつたが結果的に良しとしよう。改めてお互いの気持ちを確認できた良い機会だったしな。

「じゃあこれから家族会議でもしましょうか」

「それなら俺はこの辺で一回帰りますね」

「あら、何言ってるの宗輝君。家族会議なんだから宗輝君も参加しないと駄目でしょう」

いや、あれでも恥ずかしかったのにまだ続けるんですか千紘さん。案外千紘さんはSっ気が強いのかもしれない。

「いやでも家族会議ですしおすし」

「だから家族会議でしょう？ だったら宗輝君も必要よね？」

「あ、はい分かりました」

そして、家族会議とやらが始まる。

内容は至ってシンプル。俺と沙綾の馴れ初めやら何やらをアルバムを用いて振り返ろうという企画だったのだ。お陰で俺と沙綾はまたしても辱められる事となった。紗南や純は根掘り葉掘り聞いてくるし。もうやだ恥ずかしくて軽く泣けてくる。

「あ、今日は泊まって行ってね宗輝君」

「でも寝る場所無いんじや……」

「寝る場所ならあるでしょう？」

「……」 ツンツン

「ん？」

袖をツンツンされたので振り返るとまたしても顔を赤らめた沙綾を発見。既に物凄く嫌な予感がするが逃げられない事は確かだし大人しくしとこう。

「私の部屋で良ければ……」 // //

「ぎゃ、逆に良いのか？」

「うん。今日は一緒に居たい…… かな」

隣で亘史さんの目と耳と鼻を押さえて満面の笑みを浮かべている千紘さん。鼻押さえる必要は無いのでしょうか？そのせいで口でしか息出来なくなってるけど亘史さん大丈夫

かな…………。

「因みに今日は私達は良く眠れそうだからあんまり音とか鳴つても起きないからね♪」

何が因みになのかは聞かないでおこう。小悪魔的な笑みを浮かべる千紘さんが亘史さんを引きずって寝室へと戻っていく。それに合わせて純と紗南もリビングから自分の部屋へと戻っていった。

「じ、じゃあ俺達も寝るか」

「うん………… よろしくね宗輝」

このテンションだと変な意味にも捉え兼ねないから煩惱退散の歌でも歌っておくか。

沙綾が一人、沙綾が二人、沙綾が三人………… つて最高じゃねえかそれ!!

「今日は眠れそうにないな……」

）
f
i
n
）

I
F
√
:
約
束

H a p p i n e s s
F a i r y
T a i l

『それじゃありんりんおつかれ！』

「あこちゃんもお疲れ様」

「隣子ー、ご飯出来たぞー」

『りんりん宗輝呼んでるよ？』
「うん、じゃあ行ってくるね」

これは私の夢の様な幸せなお話。

『頂きます！』

「あことNFOやってたのか？」

「うん、今日から新イベントが始まるからって」

「なるほどね」モグモグ

だから朝早くから起きてPCいじってたのか。モゾモゾし始めたからトイレなのかと思いきや布団から出て帰ってこないし、俺が二度寝して起きたら既にR i n R i nモード入ってるし。最近朝のおはようが少なくなってきた気がする。

「宗輝君は準備してお出かけ？」

「ちよつと巴達とお茶してくる」

「ならお家で待ってるね」

「前みたいに鍵掛けたら駄目だぞ？」

「だ、大丈夫だよ」

この前俺がお出かけして帰って飯食おうと思つたら鍵掛かつて入れないし、燐子に電話しても一向に出ないしでどうしようかと思つたわ。結果燐子が寝落ちしてただけなんだけどな。マジで家よじ登って窓から入ろうとか焦つてたからな。

「イベント初日の朝から大変だな」モグモグ

「あこちゃんも張り切ってるみたいだよ」

「練習の時にあこがNFOの話すると俺が友希那に怒られるんだけどなあ」

これに関しては俺一切悪くないよね？だって俺と一緒にやってるわけじゃないんだし。いや時々はパーティー組んでクエストいくけどさ。大半は燐子との二人パーティーでクエストやら何やらしてるし。あ、玉子焼き美味しい。

「まあ友希那さんも悪気……は無いと思うけど」

「悪気があつたら完全に八つ当たりだからな。というか今日は練習は無いんだっけか」
「うん、一日offにしてリフレッシュしてきてつて友希那さん言つてたよ」

友希那にしては珍し……くも無かったな。リサと猫カフェ巡りするからつて練習を前日にキャンセルしてまで行くくらいだからな。なんなら俺にも連絡がくるまである。それを機に紗夜さんも日菜と出掛けてるらしいし、あこと燐子は相変わらずNFOやってるし。

「燐子はどつか出掛けないのか？」

「お昼からもあこちゃんに呼ばれるかもしれないから」

「あこならあり得る話だな」

「宗輝君は気にせずお茶してきてね」

「お留守番頼むな」

さてと、大人しく留守番してくれるみたいだし行きますかね。

ピコン

「りんりん起きてる？」

「あこちゃんからだ」

宗輝君がお出掛けしてから数分が経った。お昼ご飯は宗輝君が作ってくれたから、せめて片付けはやろうと思つて食器を洗つているところであこちゃんからメッセージが飛んでくる。

「起きてるよ。どうかしたの（・・？）」

「お姉ちゃんがどつか出掛けちゃったからイベントの続きしよーよ！」

そういうえば、さつき宗輝君が巴ちゃん達とお茶つて言つてたつけな。でも巴ちゃんは何であこちゃんに行き先を伝えてないんだろう？

『もしもーし?りんりん聞こえてる?』

「聞こえてるよあこちゃん」

『今日は練習も休みだしいっぱいイベント走れるね!』

「うん…… 何か手伝わせちゃってごめんね」

『何言ってるのりんりん!あこ達は仲間でパーティーじゃなか!』

あこちゃんの真つ直ぐで素直なところに今まで何度助けられただろうか。今もこうして私と一緒に居てくれる。その事が嬉しくて嬉しくて、つい微笑んでしまって。それをマイクに拾われて”りんりん何で笑ってるの?”とあこちゃんに聞かれてしまうのも私のいつも通りの日常。

「あこちゃん、いつもありがとう」

『これくらいどうって事ないよ!あ、それより聞いてよりりんりん!』

こうして、昔から話のネタが尽きないのもあこちゃんらしいところだったりするよね。

『最近紗夜さんやりサ姉が宗輝と何かしてるっぽいよ』

「宗輝君と?」

『この前も三人でどっか行ってたみたいだし』

そんな話は宗輝君からは聞いてないから本当かどうか分からない。基本宗輝君は今日の日に行き先や相手はしっかりと伝えてくれるから、私も出掛ける時は伝える様にしているし……。

『りんりんもしかして……』

『浮気されてる？』

あこちゃんの口から出た言葉は信じ難いものだった。

「……………浮気？」

『前に読んだ漫画でそんな展開があつた気がする！』

確かにそういったジャンルの漫画やアニメがあるのは私も知ってるし見た事もある。でもそれはあくまで非現実的なもので関わりのない事だとばかり思つてた。

「で、でも宗輝君はそんな事しないと思うよ？」

『そういうのはお互いのすれ違い？ かなんかで起こっちゃうらしいよ』

「すれ違いかあ……………」

『りんりん心当たりある？』

無い……と一口に言っ飛ばせば嘘になるかもしれない。最近宗輝君がよそよそしくしてるのを何度か見かけた事もあるし、私だって今回のNFOのイベントの為に準備するので部屋に籠ってた。それが理由になるかは分からないけど、宗輝君にとって何か嫌な事でもあったのかもしれない。それに気付く事が出来ない時点で、彼の彼女として相応しく無いのかも。

「……………無いよ」

『そっか、まあまだ分からないし大丈夫だよ！』

「そうだと良いな」

とにかく今はイベントが最優先事項。あんまり変な事考えないで集中しないと。

「あこちゃん」

『ん？なににりんりん？』

「イベント、絶対に成功させようね」

『うん！あこに任せてよ！』

「ちよ、巴やめてくれ……」

「良いだろこれくらい。今更なんだしさ」

「ほら、そろそろ良いですか？」

「紗夜さんまで……」

俺は現在羽沢珈琲店に足を運んでいる。

「私を忘れてもらっちゃ困るな」

「リサ駄目だつてば！」

「大人しくしておくのが身の為よ」

「ちよ友希那!!」

何故俺が休日の昼間から羽沢珈琲店に来ているのか。

「宗輝君……」

「つ、つぐみ…… どうかな？」

その理由は簡単だ。

「うん！凄く似合つててカッコいいよ！」

「ほ、本当か!?良かったあ……」

取り敢えず絶望的に似合わない事態にならなくてホッとした。

結婚式にて新郎が身に付ける服装にはいくつ種類があるのだが、やはり一般的に知

られているのはタキシードだろう。今はその試着をしていたところである。何故タキシードの試着を？なんて野暮な事は言わないで欲しい。

「やっぱりアタシの見立ては間違っってなかったね」

「流石は今井さんね」

「今回ばかりはリサに助けられたな」

「ん？今回ばかりは？」

「すみません、いつもお世話になってます」ペコリ

「ん、よろしい」

リサは怒るとちよー怖いので先に俺が謝っておく。あの友希那でさえビビってたくらいだからな。あこなんて泣いてたぞ。もう二度とリサを怒らせたりしないと誓ったね。

「いやー、なんか達成感すごいなー！」

「巴もすまん。わざわざ付き合ってもらって」

「何言つてんだよ宗輝。さつきも言つたろ？今更だつて」

「それでもだよ。他のみんなもありがとな」

今日ここには来てない面子もいっぱい居る。有咲や沙綾、蘭に美咲に花音先輩。彩や麻弥や日菜だつて手伝つてくれた。全員の力添えがあつてこそこのタキシードだと思う。

「最初に頼まれた時は耳を疑いましたよ」

「まああれだけ真剣に頼まれちゃ断れないけどさ」

「いや本当に無理言つてんのにあっさり承諾してくれたからビックリしたぞ」

「宗輝君は私達が断ると思つてたの？」

「まあ若干」

だつていきなりだよ？今まで付き合いがあつたとはいえ”結婚式で着るタキシード作り手伝つて下さい!!”なんて言われて、はい分かりましたで通るとは思わんでしように。

「私達を舐めないで欲しいわね」

「別にそんなつもりは無かったんだけどな」

「それに、頼まれたのはこれだけじゃないしな」

「……そろそろ時間だね。それじゃ行くっか」

く都内某所く

カランコロロン

『いらっしやいませ』

場所は変わって都内某所。つぐみんちからそう遠く離れている訳ではないが、いかにせん人数が人数だ。ここに来るまでにやれ飲み物だの小腹減ったのでコンビニへ。勿論、財布の口が開くのは俺のものだけだった。皆さんお金はもつてらっしゃいますよね？ないの？どっかに落としてきたの？

「すみません、お願いしてた斎藤なんですけど……」

「斎藤様ですね。用意出来ておりますので奥の方まで」

「あ、はい」

やはりこういった雰囲気のお店はまだ苦手意識があるな。前にも一度来た事があつたけど、俺みたいな人間が来る所じやないからなあ。ほら、自分じや似合わないなつて思うことあるじゃん？その感覚に近いかな。

スーツを綺麗に着こなしている女性店員さんに案内してもらい、お店の奥の方へと全

員で向かう。側から見れば何事かと思うだろう。安心して下さい他のお客さん、別に變な集団とかじゃないんで。

「こちらのお部屋に用意しております」

「……遂にきたか」

「なんかこつちまで緊張してきたぞ」

「何で巴が緊張してんだよ」

「仕方ないだろ！こんなの初めてなんだからさ！」

だからといって声を張るのはやめて頂きたい。店員さんも”お静かにお願いします”って顔してるし。すみません悪気はないんです。一応頭だけでも下げとこう。

「まあ確かに気持ちは分かるわ」

「紗夜さんですか？」

「これに関しては私達あんまり知らされてないからね」

「そうね、誰かさんのせいだね」

「もしかして友希那怒ってる？」

「いいえ」

これは怒ってますね。いやまあタキシード作り手伝わせた挙句、花嫁衣装の最終チェックにまで連れてこられてる割には何も言っていないからな。今度猫カフェで何か奢ってやるから我慢して欲しい。

「出来れば蘭ちゃん達も居れば良かったんだけどね」

「仕方ないさ、モカとひまりの三人でライブ見に行ってるんだし」

「ハロハピの全日本笑顔化計画初日だっけ？」

「改めて聞いても意味分かんないな」

弦巻家主体で現在進行形で開催されているライブツアー。何でも裏では何億とかいうお金が動いてるとか動いてないとか。そんな国家機密みたいな情報をホイホイと一

般人の俺にわざわざ教えてくれなくてもいいと思うの。

内容はシンプルで日本全てを笑顔にする為にハロハピが全国各地でライブを行うと
 いったものであり、規模だけで言えばその辺のミュージシャン達よりも余程大きい。流
 石は弦巻家といったところだろう。高校卒業と同時に飛躍的に成長し有名となったハ
 ロハピは、その内日本だけでなく世界を舞台に活躍するのだろう。それこそころやハ
 ロハピのモットーである”世界を笑顔に”を体現するような存在になるのかもしれない。

因みに薫先輩のショーなんかもあるらしいよ
 閑話休題

「そろそろ準備はよろしいでしょうか」

「はい、お願いします」

ハロハピ云々については後日またみんなで話すとして、今は花嫁衣装の確認を一番優先すべきだな。

「それではどうぞ」

『りんりんそつちいったよ！』

「分かった！」

ドカーン！

『ふう……今どれくらいポイント貯まってる?』

「現時点で10,237ptだよ」

『結構貯まってるねー』

宗輝君が家を出てから数時間が経った。今も変わらずあこちゃんとNFO内のイベントを走っている最中。集中してやってたからなのか、少し腰が痛いし目も疲れてきた気がする。

「でも……1位の人とまだまだ離れてる」

『どれどれ……って、1位って戦女神ヴァルキュリアの零じゃん!!』

「だから簡単にはいきそうにないね」

戦女神ヴァルキュリアの零。NFOをやっているプレイヤーなら一度は必ず耳にした事があるだろう

名前。その名の通り、NFOの伝説レジェンドとも言えるプレイヤーである宗輝君と並び立つ者として語られる最強のプレイヤー。高校生の頃は密かに憧れていたくらいだったけど、今はその名前をあまり見たくはなかった。

私達は現在10, 237ptで零が15, 690ptと約5, 000ptもの差がある。しかも零は今回のイベントにもソロで挑戦している為、本来であれば私達より2倍以上苦勞するのにも関わらずこの大差。やっぱり私達と決定的な何かが違うのかな？

『よくソロでこれだけのpt稼げるよね』

「私達も頑張ってるんだけどね」

ソロソロ

『ん？運営からのメッセージ？』

「本当だ……え？」

モンスターを倒したままりザルト画面で放置してたのにも関わらずに、画面が閉じてメッセージが表示される。そこには運営からのメッセージが記載されていて、その内容は少し驚くべき内容だった。

『今から時間限定でボーナスptゲットのチャンス!!』だつてさりりんりん!』

「しかもパーティーじゃないとボーナスが発動しないみたいだね」

『んー?どゆことりんりん?』

「あのねあこちゃん……」

この時間限定のボーナスptゲットの仕組み、簡単に言えばパーティーの人数が多いほど有利に働くみたい。2人であれば獲得できるptは2倍に。3人であれば3倍、4人であれば4倍に……といった形で増えていくらしく、ソロでイベントを行なっている零には一切ボーナスが働くことのないまたとないチャンス。

『おー!! だったら追いつけるかもよりんりん!』

「もう少しペース上げようか?」

『あこは大丈夫だけど、りんりんは時間とか大丈夫なの?』

「まだ宗輝君も帰ってきてないし大丈夫だと思っようよ」

それに、今回のイベントは宗輝君の為に頑張ってるからね。相手にしないといけないのは零という高い壁だけど、やっぱり負けるわけにはいかないよね。じゃないと手伝わしてくれてるあこちゃんにも面目がないし。

『りんりんと宗輝の為だもんね! あこもこれからもっと本気出して頑張るよ!』

「無理はしなくても良いからね」

『ううん! りんりんはあこの一番の友達だし、あこにとって一番大切な人だから! だから、りんりんが宗輝の為に頑張ってるのならあこが一番支えてあげたいの!』

ここまであこちゃんが私の為を思ってくれてるとは思ってなくて少し驚いてしまう。私はあこちゃんに何もしてあげられないのに。いつまでもあこちゃんを頼ってばかりだったのに。

「………… やつぱりあこちゃんはカッコいいね」

『あこなんてまだまだだよ。お姉ちゃんのほうがもつとカッコいいよ!』

「確かに巴ちちゃんはカッコいいね」

『でもさ! りんりんだつてカッコいいよ!』

「え? わ、私も?」

『うん! キーボード弾いてる時とか、何か闇の力が湧き上がってきて………… 取り敢えずバーンツ!! つて感じでちよーカッコいいよ!』

カッコいいなんて言われた事は、あこちゃんが初めてだと思う。今でこそ Rose i a のキーボードとして自信を持って弾けてるけど、最初の頃なんてみんなに合わせる

だけで一苦勞だった。そんな私を変えてくれたのがあこちゃんであり Roselia のみんなであり、そして宗輝君だったよね。

『頑張つて1位になって想いを伝えなきゃ!』

「…………… うん、分かっている」

今回のイベント、最終的にはランキング制でTOP100位内のプレイヤーは公表される事になっており、それぞれの順位に応じて報酬が設定されている。私達が狙っているのは勿論1位の報酬。

『えーっと、確か宝石か何かだったよね?』

「グレーダイヤモンドだよあこちゃん」

『そうそうそんな感じのやつ!』

1位の報酬は「グレーダイヤモンド」という宝石になっていて、今回はその宝石目当てでの参加となる。何故宝石が欲しいのかは最近になってアップデートされたNFOのシステムに関係してくる。

丁度1ヶ月程前のアップデートにより、兼ねてから噂されていたNFO内でのプレイヤー間の結婚システムが導入された。それに伴い、直近のイベントでは婚約指輪などに使われる宝石を報酬としたイベントが数多く開催され、NFOは今現在一種のPCゲームとして右肩上がりでも人気を博していると言っても過言ではないと思う。

『でも何でそのグレーダイヤモンドが欲しかったの？確かこの前のイベントも報酬が宝石だったよね？』

「まあ……私こだわりのかな」

『んー、まあ難しい事は置いといてイベントの続きしよー！』

兎にも角にも1位になれないとここまで頑張った意味もないし、手伝わてくれてるあこちゃんにも申し訳がたたない。今回ばかりは零になんて負けるわけにはいかないからね。

「……………よし、あこちゃん行こっか！」

く数週間後く

チリリリリ!!

「………… うるせえ」ポチ

「…………」zzz

「まだ寝てんのか」

朝の目覚まし時計にも素早く反応出来るようになったのも、燐子との二人暮らしを始めからだったりする。前は妹の令香が止めにくるまでであったからな。因みに携帯のアラームではなく、しっかりとした目覚まし時計である。理由は簡単、偶々寄った家電量販店にて燐子が一目惚れしたから即購入。俺としちゃ買わない理由も無かったしな。グランドピアノをモチーフにしてて可愛いし。

「取り敢えず朝飯作るか……………」

「……………んっ」

「起きたか？」

ゴソゴソしてたし流石に起こしてしまつたか…… と思いきや、寝たまま俺のパジャマの袖を掴んだまま離さない。しかも微妙にむにやむにや言つてるし。どうしてくれようかこのクツソ可愛い生き物。普通ならこのまま二度寝と洒落込むのだが、残念ながら今日はダメな日だ。

「燐子く、そろそろ起きろく」

「…… あと、5分」

「段々と俺に思考が似てきたな。もう朝だぞく」ユサユサ

揺すつて起こそうと思つたが別のところが起きそうだったのでやめておく。バインバインに揺れる女神の果実を持つ燐子。恐ろしい子、早くなんとかしないと。

何とかしないとイケないのは俺の思考回路の方だったりする。

「つつてもどーすりや良いんだコレ」

「……すう」

「離す気配無いな」

何故かは分からんが最近隣子がこの調子なのだ。ちよつと前までは少し距離があつたとも言える時期があつたが、今では隣子の方から積極的に絡んでくる始末。いや俺としちやばつちこい案件なんだけど。今はお腹減つて力が出ない斎藤さんである。

しかしながら時間は待つてくれず数分が経過。仕方なく少し強引ではあるが引き離して台所へ向かつて朝飯を作り始める。流石にその音で勘付いたのか、はたまた俺がいない事に気が付いたのか隣子が目を擦りながらリビングへ入室。せめてはだけたパジャマを直してから入つてきてほしいものだ。

「宗輝君、おはよ」

「ん、おはよーさん。もうすぐ朝飯出来るから座って待っててな」

「うん、分かった」

未だ寝ぼけているのか俺の茶碗とお箸を持ってスタンバイ。俺がソーセイジと玉子焼きを器に盛り付けている間にソシヤゲのログインを済ませる隣子。というか俺の携帯でもログボ取つとかなないとやべえな。

「俺のでもログインしといて……って言うまでもなかったか」

「……」ウトウト

「携帯落とすのだけは勘弁な」

右手に燐子、左手に俺の携帯を持って次々とソシヤゲのログインをこなしていく。それもウトウトしながら。なんとも器用な事でございます。

そんなこんなで朝飯が出来上がり、テーブルに並べて頂きますしてから食べ始める。ようやく燐子も目が覚めた様子でパクパクと食べ進めていく。じゃあ話し始めますかね。

「今日は何か用事あるのか？」

「特には無いよ」

「なら良かった」

普段と何一つ変わらないフリを装って話を振る。まあ今日燐子が予定無しっていうのは既にサーチ済。高校時代に薫先輩に習った演技力のお陰かもしれない。何の力にもなれないかもしれないが、絶賛開催中のハロハピのツアーの成功でも祈願しておこう。

「宗輝君は何か用事？」

「うん、燐子にもついでに来て欲しくてき。駄目かな？」

「大丈夫だよ。何処かお買い物？」

「それは着いてからのお楽しみって事で」

「じゃあ楽しみにしてるね」

純粹無垢な燐子の笑顔、チヨー可愛い。やっぱりウチの彼女さんは何させても可愛いかな。おまけに頭も良くてスタイルも良いときてる。まさに女神様といったところだろう。と、第三者から見れば気持ち悪い心の中での独り言はやめて準備してくるか。

バタン!

「よし着いたぞー!」

「運転お疲れ様」

「ありがとさん」

燐子が助手席に乗り俺が車を運転すること数十分。都会とは思えない程の自然が綺麗な駐車場へ到着。

「これからどうするの?」

「ん?良いからこっちこっち」

「ちよ、宗輝君?」

あまりべらべらと喋り始めるとボロが出る可能性があるので早めに目的地へ向かうとしよう。まあ案外燐子って鈍感なところあるから大丈夫そうだけどな。鈍感という

かドジっ子属性というか天然というか。高校時代ならドジっ子属性なら花音先輩居たし、天然属性なら天下のおたえさんが居ましたからね。丁度良い塩梅なのが燐子だったのかも知れない。

燐子の手を引き歩き続けて2、3分。カップラーメンを待つ間に辿り着く事が出来たのは、俺が何度もこの場所を下見して最速ルートを研究してきた賜物だろう。そんな大袈裟に言える事でも無いんだけどね。いや本当に、何に対して熱量注いでるんだよって話だよな。

「宗輝君……ここは？」

「どこだと思おう？」

「うーん……何かの教会？」

「50点つてとこだな」

歩いている内に見えてきたのは、燐子の言う通り教会らしき建物。だがしかし、燐子

の回答では50点といったところ。

「実はここ結婚式場でな」

「結婚式……結婚式場!? な、何でそんなところに?」

「まあまあ。取り敢えず行こうぜ」

若干取り乱し始めた燐子だが、まだまだこれは序の口。これからもつと凄いの用意してるからな。この後の反応が楽しみなSの宗輝君です。

綺麗な草花を生い茂らせる庭園の様な場所を抜け、式場の入り口へと到着。というか本当に細かいところまで綺麗にしてんなあ。流石は弦巻……おつと、これ以上は禁句だな。

「扉開けてみ」

「う、うん」

一度燐子とは手を離し観音式の扉を開ける。

ガチャ

「……………綺麗」

「こういうの西洋式？って言うんだっけか」

晴天に恵まれた青空、激しく照りつける太陽の光を浴びて一層キラキラと輝くステンドグラス。内装は白を基調とした落ち着いたデザインで、やはり燐子の言う通りアニメやらでよく見る教会を彷彿とさせる。

「……………」

まあ初めて見る燐子は仕方ない。俺だつて初見の時は言葉無くしたからな。燐子が周りを見てる間に用意するかな。

「燐子、ちよつと良いか？」

「うん」

「こつち来てくれ」

一度その部屋を出て、もう一つの部屋へと案内する。今度は俺が扉を開けて中へ手を引いたまま入室。

「ツ!!………… 宗輝君………… これは？」

「見て分かるだろ？ウエディングドレスってやつだよ」

その部屋に置いてあったのは、先日みんなで仕上がりを確認したウエディングドレス。正直なところ、俺はウエディングドレスの知識なんて全く無かつたし説明されても

分からなかった。だから、そこら辺はリサや友希那達に意見を貰って最終的に俺が判断した訳だ。

しかし、普通のウエディングドレスでは俺は少し満足出来なかったので特注品を用意させてもらった。

「黒の……ウエディングドレス？」

「こっちは完全に俺の好みだったんだけど……どうかな？」

「凄い綺麗……私好きだよ」

気に入ってもらえて一安心。因みに白のウエディングドレスは「貴方の色に染まります」的な意味合いを持つらしい。黒のウエディングドレスにもそういうのがあるらしく、プランナーさん曰く「貴方以外には染まりません」という強い意味が込められているらしい。あまり違いは無いらしく、最近では海外で人気っぽいとの事。

「ここまでで大体察してると思うけど…… まあ良いか」
「宗輝君？」

最後にこの結婚指輪マリッジリングでトドメの一撃を放とう。

——俺と、結婚して下さい！——

——はい……喜んで！！——

その夜

「RinRin と 輝 は 結婚した！」

「なんかアツサリしてんな」

「ふふ…… そうだね」

俺の用意していたマリッジリングごと結婚指輪。運命とも言うべきなのか、NFO内で燐子が用意してくれていたグレーダイヤモンドの指輪とモロ被りしたのである。話を聞いた時は泣きながら驚いたな。

そして、早速試してみようと思いPCが二台並べて設置してある所謂「ゲーム部屋」にてNFOにログイン。俺の方は少し久し振りのログインだったのでインストール時間やら何やらで数分待たせてしまった。その間燐子はリビングに行つてアイスを取ってきてくれた。なんて出来た彼女……いや婚約者なのだろうか。お風呂上がりにアイス食べながらPCゲームとはオツなものである。

「というか燐子滅茶苦茶強くなつてね？」

「そうかな？」

「だつてあれだろ。この前この指輪をかけて零と戦つて勝つたんだろ？」

「まあ、あれはボーナスとか色々あつたからね」

このグレーダイヤモンドの指輪を手に入れる為に一生懸命イベント走つてくれたみたいだし。まさかウチの妹に勝つてしまうとは。あれで結構負けず嫌いなどころあるからな。だからこの前電話で色々と愚痴聞かされたわけだ。

「これ結婚したは良いけど何か変わるのか？」

「んー…… ストレージの共有化と各ステータス上限解放、それに称号なんかも解放されてみたいだね」

「称号？どれどれ…… おいおい、一部プレイヤーに反感買いそうな称号ばつか増えてんぞで」

” 幸せ者 や” 夫婦” といったポピュラーなものから” 愛の体現者 や” ラブ・ドリマー” など絶対に付けたくない称号までバツチリ解放済。俺も高校入るまではこんなクソ食らえとしか思ってたけどな。今考えてみりや、ガールズバンドメンバーや隣子に会えなかったらこんな風にならなかつたと思うと冷や汗が止まらない。

「宗輝君も指輪ありがとね。高かつたんじゃ…… ないの？」

「まあそれなりにな」

嘘ですごめんなさい給料3ヶ月分とか良く聞きますけどそれ実は3ヶ月分どころじゃないんです。店舗で色々探しててこれだア!!って見つけて値札見た瞬間凍り付いたね。人間こういうレベルになるとマジで言葉出なくなるんだよ知ってた？

「グレーダイヤモンドの石言葉って知ってるか？」

「ありのままとか……自分らしくとかだったような気がする」

「良く知ってるな。そんなでもってグレーダイヤモンドは永遠の愛とか絆だとかを築く守護石、みたいな意味もあるらしいぞ」

俺はポエマーなどでは断じてない。だがしかし、結婚指輪くらいなら夢を見させてもらっても良いだろう。現に燐子の顔が段々と赤くなってるのが丸わかりだし。そんな顔されると俺も恥ずかしくて燐子の顔見れないんだけど。

「だからさ……この先もずっと一緒な」

「……うん」ギョッ

永遠なんて無いんだろうけど、それでも俺は何があらうと燐子の側に居る。今まで色んなことがあつたけど、その一つ一つが忘れられない燐子との大切な思い出。そしてこれからも、そんなちっぽけだけど大切な思い出と共に二人一緒に歩んで行こう。

いつか、家族みんなで笑い合つて過ごす為にも。

『ふっふっふ！我は魔王……の娘であるぞ!!』バーン

「ちよつと！めぐちゃん早く早く！」

『この力、存分に味わうが良い!!』ドカーン

「そろそろ戦闘中にお決まりの台詞挟むのやめにしない？」

『えーなんでー？お母さんみたいでカッコいいよ?』

「ウチのお父さんの方がカッコいいもん」

「権音く、ご飯出来たから降りてこい」

「あ、お父さん呼んでるから行ってくる！」

『ちよ、樺音ちゃん!?』

「また後でログインするから！」

『もー！樺音ちゃんだってお父さんに呼ばれたらすぐやめちゃうのやめてよねー!』プ
ンブン

「もうめぐちゃんとは良いの？」

「うん！お母さんも早く行こ！」

「ふふっ……急ぐと怪我するよ」

「はーい」

}
F
i
n
}

I
F
√
:
H
a
p
p
n
e
s
s
F
a
i
r
y
T
a
i
l